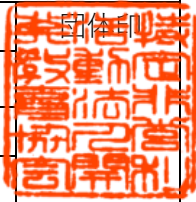


2022 年度 NGO スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2023 年 1 月 12 日		
氏名	岩岡由季子		
所属団体(正式名称)	認定 NPO 法人開発教育協会 (DEAR)		
派遣タイプ	研修受講型 (集合型)		
研修国	ベトナム		
受入機関名	主催 : Asia South Pacific Association for Basic and Adult Education (ASPBAE) 受入 : Vietnam Association for Education for All (VAEFA)		
研修期間	2022 年 9 月 16 日～9 月 25 日	研修日数	10 日間
研修テーマ	教育の公平性を高めるための TALE (変革のための成人学習・教育) の方法		

1. 導入（研修前の問題意識、所属団体や NGO が持つ課題および課題解決方策の分析など）

2015 年に国連で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」では、教育が SDGs（持続可能な開発目標）の目標の一つとして掲げられている。その教育目標においては、「全ての人に包括的かつ公平な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」と謳われている。しかし、ここで意味する教育とは子どもを対象とした学校教育がメインであり、成人教育や社会教育についても目標自体は設定されてはいるものの、あまり重視されていない傾向にある。持続不可能である社会を、持続可能な社会に変革していくためには、主に社会を動かしている大人が自ら学び続ける必要性があり、そうでないと社会は変わらない。

開発教育協会（DEAR）では、2022 年 6 月の第 7 回ユネスコ国際成人教育会議（CONFINTEAVII）の開催に伴い、2020 年に「ALE（成人学習・教育）プロジェクト」を立ち上げ、国内における成人学習・教育の関心喚起と活動推進に取り組んでいる。具体的には、第 7 回ユネスコ国際成人教育会議（CONFINTEAVII）に向けたナショナルミーティングの開催や文科省との政策対話・提案、海外の成人教育や社会教育関連団体ネットワークとの情報交換などを行っている。また、2022 年～2026 年の中期重点方針においても、成人・ユースを含めた「教育観の転換」のための取り組みを目指している。これらの活動を受けて、成人学習・教育に関する国際的な動向や日本における取り組みをより深く理解することを主な目的として、DEAR もメンバーとなっている ASPBAE（Asian South Pacific Bureau of Adult Education、アジア南太平洋基礎・成人教育協議会）主催の成人学習・教育に関する研修を受講することとした。

研修参加にあたって、主に以下の二つを研修受講の目的として設定した。

①ALE（成人学習・教育）の理解を深め、対象者に合わせた学びの構築を実践すること。

DEAR の講師派遣や教材作成等の事業において、子どもから大人まで様々な参加者を対象としたワークショップなどを企画・実施してきたが、特に大人の場合は、多様な知識や経験を既に持っており、そこに気づかせたり、引き出したりすることの難しさを感じることもある。本研修を通じて、大人の学びをどうエンパワメント・サポートできるのかを考えることで、対象者を意識した学びの場・プログラムの構築のヒントを得て、実務で活かしていきたい。

②日本の教育システムを批判的に見直すこと。

私がこれまで受けてきた学校教育は、知識を詰め込むような教育が多く、与えられた課題に取り組むことは慣れていても、自分で問いを立てたり主体的に学ぶという経験は少ないと感じている。開発教育と出会ってからは、主体的に学ぶことの楽しさ・大変さを知り、学ぶことが自らをエンパワーすることに気づいた。主体的に学ぶ体験の欠如が、大人に大きな影響を与えており、それが今の政治や社会参加に繋がっているとも感じている。そのため、本研修を通して、日本の教育システム（自分が受けてきた教育）を批判的に見直し、課題とその解決策となるヒントを得たいと考えている。また、アジア太平洋地域の国々からの参加者との情報交換や、各国の取り組みを共有することもその一助になると考えている。

2. 本文（研修テーマについて明らかになったこと、課題解決を前提とした研修実施内容の詳細報告）

2-1. 研修の概要

ベトナムのハノイにて開催された、リーダーシップ育成研修（BLDC; Basic Leadership Development Course）に参加した。主催団体は、アジア太平洋地域における成人教育分野の NGO や政府組織のネットワーク組織である ASPBAE（Asian South Pacific Bureau of Adult Education、アジア南太平洋基礎・成人教育協議会）で、ハノイでの受け入れは、ベトナム国内における障がい者やマイノリティの人権擁護と包括的教育の推進を目指す VAEFA（Vietnam Association for Education for All）が担う。

研修参加者は、インド、バングラデシュ、ネパール、パキスタン、スリランカ、モンゴル、日本、インドネシア、ラオス、フィリピン、ベトナム、ニュージーランド、ソロモン諸島、キルギス、アフガニスタンなど 15 ヶ国から 33 名（講師含む）が集まった。年代は、20 代の大学生から 60 代までと幅広く、地域や国レベルで様々な教育活動に取り組む人々が参加した。

研修のテーマは、「教育の公平性を高めるための TALE（変革のための成人学習・教育）」で、アジア太平洋地域における COVID-19 の影響が、成人やユースの教育における不公正を広げていることを批判的に捉えることや、政策的枠組みに関する理解の促進（特に基礎教育、青少年教育、成人教育のための変革的アプローチとシステム構築を可能にする政策的枠組み）、リーダーシップの育成、SDGs と SDG4 の理解促進、ASPBAE の活動の理解などがねらいとされていた。研修は 20 のセッションで構成されており、座学と参加型ワークショップが中心であったが、研修開催地であるハノイ市街において、COVID-19 の影響が教育や開発に与えている影響を知るために、地域で活動する NGO や地方政府組織、教育機関へのフィールドワークも含まれていた。

2-2. 具体的な研修の内容

特に印象に残っているセッションについて、具体的な内容を中心に、私が感じたことや考えたことなどを以下にまとめる。

（1）参加者がお互いを知りあうセッション

研修の最初は、一緒に学ぶ仲間をお互いに知りあう時間がたっぷりと取られており、そのための場づくりがとても丁寧に行われた。言葉を使わずにジェスチャーのみでコミュニケーションをとって誕生日順に並ぶアクティビティや、それぞれの名前を伏せた状態でお互いの名前を呼びあうアクティビティなど、会場内を動いて体もほぐしながらアイスブレイクを行った後に、各国の白地図を参加者が手に取って、自国を紹介し合うアクティビティが行われた。自分の住んでいる場所と仕事をしている場所・活動地域を白地図に書き込むのだが、私は日本の地図を見た時に違和感を覚えた。それは、北海道の北方四島と九州以南の島々および沖縄が抜け落ちていたためである。日本列島のイメージは本島が強いのか、運営側はこの地図を用意するにあたってあまり疑問を抱かなかったことが想像されるが、本島周辺の島々を含めて今の日本であることを伝えたいと思い、白地図に島々を書き加えて参加者に紹介した。ただ、いざ島々を書き加えようとすると、島の大きさや形、位置などが検索してみないと記憶が曖昧で分からず、加えて他国の参加者が自国の島の数や人口などをすらすらと紹介している様子を目の当たりにし、自身の「日本」に対する知識や理解が浅いことを痛感した。

また、研修期間中、常に民族衣装を身にまとっている参加者がいたことで、自身のルーツやアイデンティティを表現すること、そしてそれをお互いに尊重し合うことの大切さを肌で感じた。お互いがお互いのルーツやアイデンティティを認め合って受け入れ合う空気感が自然に作られており、とても居心地が

よく感じたと同時に、私自身の中には生まれ育った地域や国に関するアイデンティティがそこまで強く存在していないとも感じ、自身のルーツやアイデンティティを問い直したり考えたりするきっかけとなった。

（２）参加にあたっての期待と恐れとの共有

研修受講にあたって、期待していることと、不安や恐れを感じていることを書き出し、グループで共有した。私自身は、期待していることは「成人学習・教育の理解」「日本の状況を批判的に考えること」「アジアのつながりを作ること」、恐れは「英語でのコミュニケーション」と書き出した。グループで共有してみると、期待に関しては様々な意見が共有されたが、恐れに関しては私と同じように言語の壁を感じている参加者が多い、ということが分かった。私にとっては、今回の研修は数年ぶりの海外渡航であり、英語で伝えたいことを伝えられるか、相手の言っていることを理解できるか、というコミュニケーションの不安が非常に強かったので、他の参加者も同じように言語に不安を抱えていることが分かり、とても安心した。

また、参加者の不安を感じ取った講師の声掛けがとても素晴らしく、「コミュニケーションのうち言語が占める割合は 25%で、残りの 75%はボディランゲージ。これはユニバーサルランゲージだよ」「インドには 2 つの言語があるとされていて、一つはヒンディー語、もう一つはボディランゲージだよ」と、言葉に頼らず身振り手振りや顔の表情でコミュニケーションを取るものの大切さを伝え、参加者を励ましていた。特に印象に残っているのは、「英語は私たちの言語ではなく、植民地主義的な言語です。だからみんな自分の思うように、好きなように話してみて。みんな素敵なアクセントを持っているよ」という声掛けだった。これを聞いた時、「私たちが話す英語は、私たちの言語ではない」という事実だけで、その場にいる参加者がみな繋がっていて仲間に思えた、とても不思議な感覚であった。

実は参加者の中には、ベトナム人の聴覚障がい者の方が 3 人と、フィリピン人の視覚障がい者の方が 1 人参加していた。研修期間中にベトナム手話での自己紹介や挨拶などを教えてもらい、聴覚障がい者の方たちとコミュニケーションをとろうとする中で、手も体も顔の表情も使って全身でコミュニケーションをする手話がとても豊かで、コミュニケーションは本来、最大の自己表現である、と感じた。英語という言葉、音声に頼ったコミュニケーションをしていた自分に気づかされ、言葉だけでなく伝えたい、繋がりたいという姿勢や気持ちを大切にしたいと強く感じた出来事だった。

（３）変革的な成人学習・教育と生涯学習

この研修のメインテーマとなるセッションで、「あなたの教育は終わりましたか？」という講師の問いかけから始まった。それに対して参加者からは、「教育の定義は？」といった疑問や、「私が死ぬときに（教育は）完了する」といった声があった。一般的に「教育」というと、学校教育を意味したり思い浮かべたりすることが多いが、学校教育を受ける期間は長い人生の中で捉えると非常に短い期間である。学校教育を受ける期間よりも成人後の期間の方が圧倒的に長く、且つ人生はずっと一定ではなく社会状況は刻々と変化する中で、子どもだけではなく大人も生涯を通じて学び続ける必要がある、といったことが確認された。さらには、よりよい社会を築くためには、今の持続不可能な社会を変革していく必要があり、変革の主体となるために大人こそが学び、変容していく重要性がある、ということが共有された。

では変革のための教育とはどのような教育か。これについてフォーマル教育とインフォーマル教育と

いう二つの学習アプローチから議論を行った。フォーマル教育は、高度に体系化されたカリキュラム・形式に沿った教育であり、現在の学校教育を意味することが多い。一方で、インフォーマル教育は日常生活や仕事などで日常的に触れる情報などから学ぶ学習で、偶発性が強く対話などを通じて双方向で学びが生まれることも特徴として挙げられる。学校教育をフォーマル教育とすると、成人後の教育においてはインフォーマル教育が中心となること、そして、変革のためには、体系化された知識を一方通行で教えるフォーマル教育ではなく、インフォーマル教育も重要とされることが共有された。ただし、フォーマル教育とインフォーマル教育はきっぱりと線引き・分類できるものでもなく、変革的な教育の実践を目指すには、インフォーマル教育だけではなくフォーマル教育も重要な役目を果たすこと、そしてフォーマル教育も変革的になり得ることなどが、講師より説明された。

その後、生涯学習の様々な段階における学びの特徴について、グループに分かれて意見交換を行った。生涯学習とは、発展の要求に応える知的社会の構築を支援するために、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルな学習の統合を通じて、学習者中心の学習機会を提供する教育システムである。グループからは、以下のような意見が出された。

- ・ 幼児教育：家族や周囲の人間からの学びが中心、子育てする両親をどのように支援するかが重要
- ・ 小学校：様々なことに興味や好奇心を抱き、学びたいという意欲にあふれている時期
- ・ 中学校：受験が迫り、学びの楽しさを失い始める時期
- ・ 高校／大学：家庭の経済事情によって学校選びが左右される、キャリアを決めるために重要な時期
- ・ 成人期：個人の経験に基づく学習、権利の獲得、自身の文脈（職業、階級、ジェンダー、暮らす地域など）から学ぶ

各国の教育事情は全く異なると想像していたが、高校／大学までの教育事情や課題を聞いていくと、高校や大学での受験、大学卒業後のキャリア、経済的な事情による進路選択の可否など、私自身が日本の教育を受ける中で感じてきたことや体験と似ている部分も多いような印象を受けた。また、成人期の学習は権利の獲得につながる、という意見は、権力に抵抗して闘いながら一つ一つの権利を勝ち取ってきた歴史を感じさせ、アジアならではの視点だと感じた。

意見交換を通して、COVID-19 のパンデミックや気候変動の影響などによって変化し続ける社会を生き抜くためには、大人が主体的に学ぶことが必要である、ということを改めて感じた。一方で、成人教育を進める上で、その成果の図り方が難しいということや、全ての学びが本来は連結しているものの、学びが続くようなサポートはあるのか、できているのか、といった課題も共有された。

（４）シティズンシップ教育

” Fish Trading Game”という、グループに分かれて 10 年間魚をどれだけ獲れるかを競うワークショップを体験した。ゲームには、各年の最大の魚数が決まっていて且つ自分たちが得た魚数に対して次年に獲れる魚量が決まるというルールがあり、どこかのチームがたくさん獲ってしまうと、ほかのチームが損をしたり全く獲れなくなる、そして次の年は全グループにその影響が及ぶ、といったことが予想された。ゲームが始まってすぐに、「持続可能な社会を創らないと！」という声がどこからともなくあがり、資源を枯渇させないように魚の総数に合わせて各グループの獲得数を毎年決めよう、という動きが起こった。しかし、ゲームを進めていくと、翌年に残る魚量が段々減っていくという現象が起こった。つまり

どこかのグループがズルをして多く魚を獲っているのか、ゲームの裏で何かが起こっているか・・・ここで全体が混乱に陥った。「気候変動で魚が減っているのでは？」という声も挙がった。私のいたグループでは、全体で決められた獲得数を毎年獲っていたが、どうやら他のグループでは少し多めの獲得数を書いて魚を多くもらっていたことが最後に判明し、それに気づいた他のグループから非難を受けていた。

ゲーム終了後の振り返りでは、今回のようにグループ間（市民社会）でルールを作って合意をしたとしても、抜け駆けするケースもある。だから政府や国がルールを作って管理をすることも大切だ、という意見があった。今回のゲームではルールは事前に知らされていたが、来年の魚がどれくらい残るかということは現実世界では分からない。毎年気候変動で漁獲量も大きく左右される。また、今回は10年というスパンだったが、20年、30年経つとゲームの担い手も変わる。そのため、広い視野で地球や持続可能性を考えるための教育システム、そのための市民社会、国や政府が管理するシステムが必要だ、ということを感じた。

今回のゲームのように体験を通して振り返りながら学ぶことによって、現実世界で起きていることや社会課題の背景や構造をより具体的に理解することができる。開発教育ではそういった学び方を実践してきているが、改めて自身が参加者として学ぶことで、その学習効果や力を体験することができた。

（５）フィルム・フェスティバル

世界の格差、難民、子ども兵、人種差別、プラスチックごみ、ゴミによる汚染、気候変動による海面上昇、生物多様性、AIと教育など、世界の様々な国や地域の社会問題を取り上げた動画を視聴した。これまでの研修参加者や講師などから各国の動画を集めて作られたようで、目を背けたくるような厳しい問題を映した映像なども流される中で、日本の動画として流されたのは、ピコ太郎のPPAPと、吉本芸人のSDGs啓発動画であった。その時の気持ちは何とも言えない複雑なものであった。

例えば、気候変動に関して考えると、この場で一緒にこの動画を見ている人の中には、海面上昇に直面しているソロモン諸島やインドネシアの人、国土の3分の1が洪水で沈んだパキスタンの人がいるわけで、温室効果ガスを大量に排出する日本の責任は大きい。そういったことを考えていた矢先に、能天気な（ように特にこの時は見えた）ピコ太郎や吉本芸人の映像が流され、なんだか打ちのめされたような気持ちになってしまった。

おそらく日本でこの一連の動画を観たら、「世界ではこんなことが起こっているのだな」と少し他人事な気持ちで観てしまうかもしれないが、アジアの参加者たちと一緒に動画を観たことで、アジアの中での日本の立ち位置、日本人としての私の在り方、をととても意識し、考えさせられた。

（６）教育機関の視察

5つほどのグループに分かれて、ハノイ市街周辺のエデュケーション機関やNGOなどを訪問した。私はベトナムでの教育現場を見てみたいと思い、聴覚障がいのある子どもたちが通う学校「C5 Non-formal Learning Center for Deaf (C5)」を訪問先に選んだ。

C5は今年設立4年目の民間学校で、32人の幼児～小学生が通っている（訪問時の2022年9月時点）。ベトナムでは、耳が聞こえない子どもが通える学校や理解のある先生が少ないため、C5に通うためにわざわざ家族でハノイに移住するケースもあるそうで、毎週日曜日には保護者向けの手話学校も行われている、とのことだった。

先生方から話を聞いて驚いたのは、学校の経営にあたって、政府から公的な援助は無く、生徒の家族からの資金や少量の寄付に頼って運営されていることだった。先生の一人が「ベトナム政府は聴覚障がい者が何もできないと思っている（だから聴覚障がい者に対する教育環境の整備が進まない）」と言っていたのが非常に印象に残っている。また、現在 C5 で提供されているのは、幼児～小学校の教育までで、中学校以降は地域にある一般的な学校に進学することになる。これまでに生徒 3 人が卒業し、地域の中学校まで通ったが、聴覚障がい者を受け入れる体制のある学校が少ないため、高校以降の高等教育にはアクセスできていない状態であるということだった。C5 の経営状況も然り、卒業後の学びを継続できる環境やシステムをどう整えていくかが大きな課題となっていることが分かった。

（7）ジェンダー平等に向けた教育

研修 4 日目、ある程度参加者同士の関係性ができてきた段階で行われたセッションであった。自分の母親の名前、最も尊敬するところ、これがあったら・できたら母親はもっと幸せになれたのに、ということを書き出し、グループで共有していった。共有する際、涙ながらに語る人も多く、講師がそばで寄り添ったり、時折ハグをしたりしながら話していった。私の母親の場合は、結婚出産と同時に仕事を退職し、その後は専業主婦として家事や育児・介護に従事しながら暮らしていたことから、結婚出産に左右されずに女性が働き続けることができる法や制度、考え・価値観などがもっとあったら、ということを書いた。他の参加者の話を聞いていくと、経済的な事情や女性蔑視の風習によって、男性と比べると教育や医療をまともに受けられなかったという話や、例えばインドでは、違うカースト間での結婚によって、家族に思うように会えないといった、各国や各地域の文脈におけるジェンダー課題が共有された。家族のことをシェアするというのは、痛みを伴う場面もあるが、家庭の中で起きていることを共有することで、女性や母親が直面する問題（貧困、無力さ、家父長制）が見える化され、個人の問題とされていたことが実は他の人に共通することと分かり、社会の問題だと捉えられる、と感じた。

（8）各国の事例共有

各セッションの中では、各国の参加者より、教育に関する現状や各団体の活動内容などが共有された。その一部を紹介する。

・インドの事例（ジェンダー平等に向けた教育）

タクシードライバーやバスドライバーなど、これまで男性の職業とされてきた分野で女性が進出・活躍することを支援しており、男女の職業機会を広げることでこれまでの分離を壊す取り組みを進めている。

・ラオスの事例（子ども・若者の参画とエンパワーメント）

地方では、子ども一人を学校に行かせることが経済的に難しく、家畜や土地を売らないといけないケースがある。学校を卒業しても地域の中で働く場所はないため、若者は都市へ流出してしまう。学校が無料で通えたとしても、教育の質は良くない。そのため、学校教員の確保や教員養成の質の向上、施設や備品の整備に加えて、教育を受けさせる意義などを保護者に伝えるなど、様々な働きかけを行っている。

・ソロモン諸島（コロナ禍における教育課題）

コロナ禍によって学校に通えない子どものために、自宅からラジオを使って受けられる教育継続プログラムを実施している。特に辺境地の島では、ラジオへのアクセスすらないところもあり、政府と共同でプログラム開発に取り組んでいる。

・インドの事例（コロナ禍における教育課題）

コロナ禍で、母親が子どもからスマホの使い方を教わり、社会とつながりを得られるようになっていく。地理的に離れていても ZOOM など母親同士がつながり、医療や生活全般のことなどについて情報交換をできるようになった。また、基礎教育を受けられていない母親たちは、スマホで読み書きや計算などを学ぶようになった。

・アフガニスタンの事例（緊急時の教育）

昨今の政治事情によって、67%の女の子、55%の男の子が学校に通えていない。一時的な学習場所を立ち上げて、緊急時でも子どもたちが教育を受けられる一時的な場を提供し、特に女の子が学校に戻れるよう学校へのアクセスの支援や教材の支給などを行っている。また、先生へのトレーニングも積極的に行っている。タリバンの支配下で情報操作が進む中、物理的に学校に集まることが難しくても、オンラインでつながるなど、ICT 技術が教育に役に立っている。

日本の状況や教育課題と比べると、特にアフガニスタンの事例など、比較することすら難しいくらい状況が違っていると感じる部分も多々あったが、課題解決に向けて目指す先は同じであると強く感じた。各国とも、歴史や文化、習慣などが異なるが、共通する課題意識や目指すべき方向を共有できたこと、そして各国の文脈に合わせた実践が工夫して行われていることを知り、私自身が勇気づけられた気持ちになった。

（9）風船のワークショップ

全員が集まり、数名が画鋸、残りの人は膨らませた風船を持った状態で、「制限時間は1分です。できるだけ風船をたくさん残すことがミッションです」という講師の説明があり、ワークショップが始まった。始まった途端、風船を割られまいと逃げ惑う人たちが溢れ、私も必死に風船を守ったが、最終的には割られてしまった。1分間がとても長く感じ、終わった後に振り返る中で、その時に強い恐怖を感じていたことを実感した。画鋸をもって走り回ること自体、体を物理的に傷つける恐れがあって怖かったが、それに加えて逃げる場所が限られ精神的にも追い詰められたように感じ、ずっと安全ではないと感じていた、と気づいた。

実は最初の説明では、「画鋸で風船を刺せ」とは一言も言われていないので、「風船を残す」というミッションをちゃんと聞いて理解していれば、画鋸を使わずに風船を一緒に守る行動も選択できた。しかし、画鋸を持った人たちは、画鋸を持った瞬間、それで風船を刺すものだと思い込んでしまった、ということだった。

画鋸を持った人は少数派だったが、武器や軍事力もそうであるように、その力は保持するだけでとても強大であることを身をもって感じたのと、その力をどのように使うのか、使い方を見極めることがとても重要だと感じた。例えば、私も多数派として社会の中で権力を持つ状況において、自分の持つ力をしっかりと認識できているだろうか、と考えさせられた。

3. 考察・提言

3-1. 結論

（1）成人学習・教育について

今回の研修を通じて、大人が学ぶプロセスや場づくりを体感して学ぶことができたことが非常に大き

な収穫であった、と感じている。これまで DEAR の事業で参加型ワークショップを実践する中で、対象者に合わせて講座の企画をしてはいたものの、子どもや大人の学び方の違いや、コミュニケーションの取り方などはさほど意識できてはいなかった。今回の研修では特に、気持ちや感情を正直にシェアすること、これまでの人生経験を思い出して振り返りシェアすること、頭だけでなく体を動かして体感すること、といったことから大人が学ぶ意義は非常に大きいと感じた。

また、研修講師から学ぶことも多く、全ての人分かるように、目を見ながらゆっくりはっきりと話すという基本的な話し方や、相手を尊重し理解しようとする態度、参加者のコンディションに合わせて柔軟にプログラムを組み替えたりする様子から、参加者が第一の場づくりをしていくことなど、今後の講座企画や運営にあたって私自身が意識していきたいコミュニケーションやファシリテーションのヒントを得ることができた。

（２）日本の学校教育について

私がこれまで受けてきた日本の学校教育では、多様性の尊重と謳いつつ、実際は画一性や同質性が優先され、「みんな同じ」であることが求められてきた、という実感がある。しかし、今回の研修においては、「みんな同じ」であることが安心・安全ではなく、「みんな違う」ことが尊重される方が安心・安全である、と感じた。学校やクラスの中に既にある多様性に目を向けると同時に、異なる歴史・文化を持つ人々と交わって学ぶ中でこそ気づけることがあり、そういった様々な違いに出会うことが大切だと感じた。そうすることで、他者の視点を得て、自分の考えや価値観を広げることができ、世界で起きていることと日本で起きていることのつながりや、アジアの中での日本、世界の中での日本という視座を持つことにもつながると考える。

また、これらの気づきを得るためには、教科書や先生から知識を学ぶ教育だけではなく、自分の感覚や感情に気づき自分を大切にすること、自分の考えや意見を主張したり表現したりすることなど、自身の内面に目を向けることが今後の教育において必要である。それができて初めて、他者を尊重するコミュニケーションが成立し、外の世界に向けての理解や行動が伴う。また、人生において学び続けるためにも、内省するスキルを身につけることは必要である。開発教育の実践においても、参加や学びを振り返ることは大切にされているが、振り返りに十分な時間が確保できているか、振り返りの方法がたくさんある中で対象者に合わせた振り返りを実施できているか、振り返りを深めるための問いかけやファシリテーションをできているか、といった課題もあるため、これについては今後の事業にて引き続き考えていきたい。

（３）今後の活動について

各国の教育に関する状況や実践を共有する中で、日本との状況の違いや差を感じつつも、それぞれの文脈で活動や実践を重ねていくことの大切さを実感した。そして、それぞれの活動の根底には今の社会に対する問題意識や課題感を共通して抱いていることが確認でき、アジアの参加者と繋がりを作れたことがとても心強く感じた。今回の研修では、歴史的にもつながりが深い韓国や中国といった国々からの参加者はなかったが、今後は東アジアの国々とより連帯し、教育に関する課題や実践を学び共有していきたい。

3-2. 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

(可能な限り具体的に記載下さい)

DEAR は、開発教育の担い手を増やし実践を広げていくことに取り組んでいる。そのためには、開発教育に触れる機会を増やしてその魅力を伝えとともに、実践者を育てていくことが欠かせない。特に開発教育を実践するにあたって、実践者（多くの場合、大人）への教育的アプローチはとても重要であり、学習者だけでなく実践者が自身の持つ知識や価値観を見直し、学んでいくことが重要だと考えている。

研修成果の具体的な活用方法としては、DEAR では、開発教育に携わる実践者（学校教員、NGO・NPO 関係者、会社員、学生など）を対象として、開発教育ファシリテーション講座を開催しており、その企画に活かしたいと計画した。今年度の講座は、本研修終了後の 10 月～11 月に開催となり、研修で学んだ成人学習・教育の要素（経験をもとにした学び、気持ちや感情をシェアすることなど）を意識して、大人の学びを促すための講座の企画と運営に携わった。

また、DEAR が取り組む教材作成や各種研究会などでは、様々な分野の NGO 関係者とともに協働する機会が多くある。その中の活動で海外から見た日本の教育システムや社会課題を共有し、議論を深める機会を設け、既存の開発教育教材の改善や今後の開発教育教材やプログラム開発につなげることに取り組みたいと考えている。具体的には、本研修終了後の 12 月に報告会を開催した。約 20 名の NGO 関係者や教育関係者の参加があり、研修での体験を交えながら、成人学習・教育に関して意見交換を行った。参加者からは、「アジアの教育関係者との連帯は、日本の教育の可能性を広げる」「異文化間での学びは、自分自身のアイデンティティを見つめ直す機会になる。経験による学びは、心揺さぶられる気づきとなる。教育の方法は無限だ」といった感想が寄せられた。今後も、こういった機会を通じて、研修成果をさらに DEAR の事業や NGO での活動の広がり還元していきたい。

3-3. テーマに関する日本の国際協力分野への提言

持続可能な社会の実現を目指して「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」は採択されたが、その推進のためには、SDGs の意味や本質をしっかりと理解し、現在の持続不可能な社会の背景や構造を理解することが大切である。そして、この社会を変えていくためには、未来を担う子どもだけではなく、現在の持続不可能な社会を変革していく主体となる大人を対象に理解促進を働きかけていくことがなにより重要である。国際協力業界においては、こうした SDGs の本質的な理解を促すことに加え、大人が主体的に学習や社会に参加するための視点から、開発教育をより推進していくことの重要性が認識されることが必要だと考える。

4. 団体としての今後の取り組み方針 (団体の責任者がご記入ください、800 文字程度)

本研修は、成人学習・教育の理論と実践、課題について学ぶとともに、日本の教育にかかわる当会の活動への示唆を得るために参加してもらった。報告書にあるように、アジアの仲間と共に、持続不可能な社会の実態を学び、知識や経験、感情を共有し、議論し、ふりかえる一連のプログラムから、多くのことを学んでいる。このプログラムの企画、運営、講師の言葉、参加者と共に作り上げるプロセス自体が、成人学習・教育の実践であり、その一員として体感できたからこそ、学びが大きかったと言える。

当会でも、教材作成や学習プログラムの実施は、子ども向け、大人向けに行っているが、今まで、成人学習・教育の観点はあまり深められていなかった。2021 年度から ALE プロジェクトを立ち上げ、第 7 回

国際成人教育会議への参加、その前後でのミーティングの開催を通して、意識啓発や政策提言活動を行っている。「変革的成人学習・教育（TALE）」の観点をより、従来の事業の中に反映させていきたいと思っており、このタイミングで、研修に参加できたことはとてもよかった。

今後は、報告書にもあるように、当会の講座や講師派遣などにおいて、成人学習・教育の視点を反映できるような取り組みを進めていきたい。そうすることで、おとな自身が学び、社会にかかわることの重要性を広めていきたい。具体的には、今回の研修でも各国から発表されたが、市民によるアドボカシーの観点についても、成人学習・教育の観点から発信していきたいと思っている。

また、組織としては、開発教育の実践指標のようなものを作成する方向になっているので、そこにも成人学習・教育の観点を反映したいと思っている。さらに、職員自身が今回のような主体的な学習を続けられるような体制をつくっていけるように考えている。

5. その他

5-1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

本研修を利用させていただき、ありがとうございました。本研修の採用通知を受けて 2 週間弱で研修参加するという時間が限られたスケジュールでしたが、事前のオリエンテーションや研修計画作成などを短い期間で柔軟にご対応いただき、感謝申し上げます。

5-2 写真類及び研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、添付



写真 1：研修参加者と講師の集合写真



写真 2：聴覚障がいのある子どもが通う学校「C5」への訪問の様子



写真 3：研修セッションの様子①



写真4：研修セッションの様子②